

守 対談 破 創

「美しい景観を創る会」会長として、「日本は美しくない」ことをまず認めようという過激な発言をしている伊藤滋先生。その根底には美しい都市づくりへの情熱がある。建築への造詣の深い西村清彦審議委員が、東京文化論から都市の未来まで、ズバリと切り込んだ。すと思ひ掛けない東京の成り立ちが浮き彫りになり、日本ならではの都市づくりのヒントが幾つも浮かび上がってきた。



日本銀行政策委員会審議委員

西村清彦

Kiyohiko Nishimura

[にしむら・きよひこ] 1953年生まれ。1975年東京大学経済学部卒業、1977年同大学院経済学研究科修士課程修了。1981年米国ブルッキングス研究所オークンリサーチフェロー、1982年米国イェール大学Ph.D. (経済学博士) 取得。1983年東京大学経済学部助教授、1994年同教授。2003年内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官、東京大学大学院経済学研究科教授。2005年より日本銀行政策委員会審議委員。

山の手・下町をさらに南北に分けると 東京の都市の成り立ちと未来が見えてくる



伊藤滋都市計画事務所所長・
早稲田大学特命教授

伊藤 滋

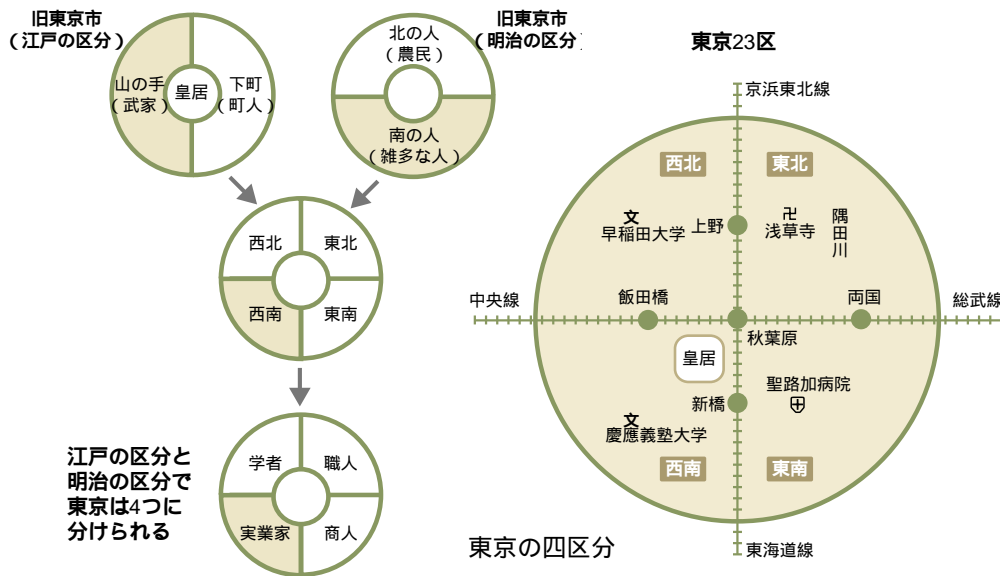
Shigeru Ito

[いう・しげる] 1931年生まれ。1955年東京大学農学部林学科卒業、1957年同工学部建築学科卒業、1962年同大学院工学系研究科博士課程建築学専攻修了(工学博士)。MIT・ハーバード大学共同都市研究所客員研究員、東京大学工学部都市工学科教授、慶應義塾大学環境情報学部教授、同大学院政策・メディア研究科教授、東京大学名誉教授、早稲田大学理工学部教授などを経て、2002年早稲田大学特命教授。著書は、『東京育ちの東京論』(PHP研究所)『東京のグランドデザイン』(慶應義塾大学出版会)など多数。(NPO)日本都市計画家協会名誉会長。

西へのコンプレックスが 独自の東京文化論を生む

西村 今日、戦後の都市計画とともに歩んでこられ、日本の都市についてさまざまな提言をされていらつしやる伊藤滋先生にお越しいただきました。「都市の未来」や先生のユニークな都市論、「はちやめちや都市論」(笑)についてお聞きしたいと思います。

伊藤 私は、東京ですつと育ちましたけれど、江戸っ子ではありません。二三区内に三代前から住んでいる生粋の江戸っ子は恐らく数%程度でしょう。もともと江戸も田舎の大名がつくった町でしたし、東京も田舎者がつくった町といえます。明治維新後、本当に実力があつて、商売に秀で、学問に秀で、家系とか歴史を背負っていない日本中の田舎者が集まって、東京をつくってきたように思われます。なかでも、明治維新で勝った西方の次男坊、三男坊の頭の回転のいい人が来て、彼らに暮らしたい町をつくってきたのです。負けた側の東 私の両親は北海道出身でそこから東京に移り住んだわけですが には西に対する屈



折した感情があるんです。このや
るうってね（笑）。
しかし、いつまでも西コンプレ
ックスでカッカしていてもしょう
がない。そこで、考えたのです。
「一寸の虫にも五分の魂」だ。北海
道や東北から来た人間がいないと
東京が成り立たない側面もあるは

ずだと。

西村 その発想から、北、南、山
の手、下町の分類での東京文化論
を、考えつかれたわけですね。そ
れぞれの町並み、暮らし、気質に
特徴があると。

伊藤 これまで山の手と下町を分
けて分析する地理学者や経済学者
はいました。しかし、私みたいな
コンプレックスの固まりの、東を
意識する考え方はほとんど入って
いません。

鉄道がもたらした 人と東京の町の変化

伊藤 ある時、鉄道ができた明治
時代に北から来た人たちが非常に
重要な役割をしたのではないかと
思いつきました。

一九世紀のヨーロッパはターミ
ナル（終着駅）全盛期で、有名な
のはパリの北駅です。このターミ
ナルを日本も導入し、南の新橋、
北の上野、西の飯田橋、東の両国
の各駅がつくられた。これらが完
成するのが、日露戦争のころです。
山手線開通でこれが全部つながる
昭和十年ごろまでの約四〇年間に
東京がつくり上げられてきたわけ
です。

東京の東北部に紙工場やおもちゃ
工場など軽工業があります。これを
支えたのは、東北から来て上野に降
り立った人たちです。一方、東海
道・横浜方面から来た西方の人たち
は、新橋で降り日本橋で問屋やサー
ビス業に就いて、麻布あたりに住ん
でいた。そういうイメージで東と西
に、北と南を入れると、どういっ
こになるでしょう。

東京三区を単純に頭の中で円を
描いて、十字で四つのエリアに分け
てみます。縦の線は、京浜東北線と
新橋から横浜まで続く東海道線で東
と西に分けます。北区とか荒川区、
台東区、中央区は東。西は文京区、
港区、麻布、赤坂などです。それぞ
れ町人と武家の居住エリアで、下町
と山の手にあたります。次に横の線
すなわち中央線と総武線で北と南に
二分すると、北の中心は上野で、南
は新橋です。

北から仕事を黙々とやるまじめ
な人たちが東京に来て、東の下町
へ行くと職工になります。たまた
ま西の山の手へ行くと、文京区へ
住むのです。東大、早稲田大、日
本女子大、学習院大などが、都の
西北にはあります。これに対して、
西南には、面白いことに、西洋の

影響があること。鉄道ができたこ
ろに、外国人居留地を今の聖路加
病院あたりにつくったのがきつ
けです。聖心女子大、明治学院大、
青山学院大などがそこから出てい
ます。それがずっと都の西南へ行
くのです。都の西南は丘の上で、
その眺めのいいところに宣教師た
ちが大学をつくりました。だから
ミッションスクールが多いのです。
西洋がぶれた西の頭のいい層が
西南へ行った象徴が、慶應ボーイ
です。あと東南は日本橋の問屋の
連中ですね。

そういう偉そうに暮らしている
人たちが南にいても、実質的に東
京を支えたのは精神的には北の西、
腕力では北の東になります。こん
なふうにながら東京を眺め
ていると、世界に発信できる材料
が数多く見つかります。

木造建築が生み出した ファジーな空間

西村 まさに東京は移民の町です
ね。もう一つの視点として、外国
人が感じる東京の面白さというの
は、いかがでしょうか。

伊藤 大森の貝塚を発見したモー
スの『日本その日その日』という

日記には、道路が清潔で、真ん中をゆったり人が歩いていることに驚いたとあります。きちんと歩車分離がされているヨーロッパに対して、日本では変幻自在に道路を使っていたのです。要するに、フアジーなのです。また、トロイの遺跡発見で有名なシュリーマンは明治十年ごろに来日。日本の労働者が清潔なことで、農村集落の一軒一軒にあつた素晴らしい花畑に感心しています。

フアジーな中でうまい形で狭い空間をやり繰りしながら、さまざまな機能を積み重ねていつて、それをずっと清潔なまま維持管理しているのです。欧米人は、そこにすぐ興味を持ちます。また、木造建築は石つくりと違ってフアジーなのです。欧米では全くつくれなかった、外か内かわからないような空間が自然にできています。だから、狭い路地のある町、神楽坂や武蔵小山の路線商店街などを見て欧米の知的階級は感嘆の声をあげるのです。

西村 横町の存在も評価したいですね。昔はちよつと行くと横町がありました。これこそ歴史遺産ではないかなという気がします。

農地改革による 権利移転の功罪

西村 昔の人にあつて、われわれに欠けているのは、不便なことを楽しむ姿勢ではないでしょうか。友人のシエナ大学の教授は、ラテイコンドリという片田舎に住んでいます。建物は石つくりで、おそらく七〇〇〜八〇〇年前のもので、すから、すごく不便です。この不便さがいいのだそつです。

ヨーロッパでは、北と南で住んでいる家も違います。私の実感から言えば、北欧の国は、ついこの間までは非常に貧しい国でした。でも、町はきれいですよ。南に行けば行くほど、確かに豊かになります。同時に貧富の差が極端になつてきます。一番極端なのはナポリでしょう。ナポリやシチリアのパレルモの壮麗な建築物と貧しい人たちの住む住居との断層は、すさまじいものがあります。

伊藤 私はいつも、日本の町は美しくないと言っています。これは戦後、権利の移転が行われたからです。それまでの階層社会がつぶされて、ある程度平準化しました。その代表が農地改革だと思つてい

ます。

終戦直後、東京には農家の次男、三男が押し寄せてきました。小作人が農地改革で地主から権利移転された土地は、彼らを迎えるアパート経営にいい場所だったのです。そこで、農地解放から一〇年もたないうちに、小作人は小資本家になりました。土地がどんどん細分化されて、アパートや寂しげな木造住宅が建った。その行動に振り回されて、日本では町づくりが動かなくなつたのです。

西村 要するに、明治維新ごろの日本の町は、階層社会ですが、本当の意味での田園都市だったわけですね。その階層の消滅で日本の町づくりは、完全にカオスと化してしまつた。歴史の皮肉ですね。農地改革による土地の細分化で、地主に昔はあつたノーブレス・オブリージュ、社会的責任感がなくなつてしまつたように思います。

伊藤 大衆社会というのは、非常にグリーディー（貪欲）で、日本社会はまさにその極致。その反動が、地方分権の主張です。でも、地方分権でいい町ができるかという疑問です。国家がきちんと筋道を立てて仕分けをしないと、町

はよくならないでしょう。

西村 欧米のいわゆる旧市街や歴史地区は、確かに美しいですが、そこから外れると日本と大して変わりません。しかも、旧市街の大きさは歩き回れる程度。他方、日本は都市国家を守る城壁がなく、町が外に広がつてしまっている。その中でどこを歴史地区として守り、どこを新たな開発対象として許すかは、難しい問題です。これを見ると、日本の町づくりは、欧米の町づくりとちよつと違った形でやらざるを得ないと思います。

「市民で景観を守れ」だけでは 町はきれいにならない

西村 気になるのは、日本では景観という視点が決定的に不足していること。景観とは、その人その人の原体験です。私にとって、東京の景観、原体験は、ニコライ堂なんです。そういう景観を守るには、それぞれの原体験を共同体の中で共通の絆とすることです。それが力になる。そうすれば、単なる町の未来ではなく、町の景観の未来をも考えられるようになるでしょう。

先生は、「日本は美しいこと



を認める宣言」、「日本を再び美しくすることを国民運動とする宣言」と、「美しい景観を創る会」でかなり過激な宣言を出しているらしいです。

伊藤 私が狙っている一つは、見苦しい企業の広告看板の徹底的な追及です。そしてもう一つ、「市民で景観を守れ」と言いますが、本当に町をよくするのに必要なのは直接設計にあたる全国に一〇万ある設計事務所です。彼らに施主に対して、町づくりの視点から発言してもらわなければなりません。実は、ここに最も焦点を絞っているのです。

平成十五年に、小泉総理のメルマガジンに町づくりに関するエッセイを書きました。最初に、電柱の地中化を取り上げたら、ものすごいヒットがありました。当時の安倍官房副長官が、それを役所へ上げると、電柱地中化第四次計画の予算が五割増しです。二番目には街路樹で、これもすごいヒット。その後、副大臣会議で国道・国道バイパスの市街地通過部分の街路樹は、要請により国交省地方整備局の予算で整備することが決まりました。

ところが、次に、建物の屋上に空調機や広告塔等が雑然と置かれ、みっともないから、皆さんで屋根をかけようと書くと、ヒットが全然ありません。屋根は自分の話ですから、途端にシユンとなってしまつのです。日本人は自分のお金を出すとなると、美しさなんてどこかに吹っ飛んでしまいます。それを何とかぶち破ろうと思っているのですが……。

西村 景観に関していうと、自分は「よそ者」だからやがて出ていくという感覚があるからでしょうね。多分、自分が帰っていくところであれば、少しは考えるのでは

ないでしょうか。コミュニティの感覚がなくなってしまうのが、一番大きな問題なんだろうと思いますね。

部分最適解の集合体が 未来の都市の姿

西村 では、最後に、都市の未来について。

伊藤 私は日本の町の未来を考えると、日本人の持っているある性向が鍵になると思うんです。いい例が、ブラジルのクリチバという有名な環境都市。そのパイオニアのポーランド系市長が掲げたスローガンをフーローアップしたのが、二代にわたる日系人の助役でした。

日本人は、「助役」として諸条件の中から最善の解を出すことには、抜群の能力を発揮します。だって、町をよくするには、その「助役」に当たる町づくりのリーダー、一種の専門職にきつちりとした権限を与えればいいのです。それだけで、日本の町は格段に良くなると思います。

部分最適解で、ある限定されたところを、ヘテロジニアス（異質であるさま）に改善していくと、

何十という町ができて上がります。その集合体の一つの大都市になるといったスタイルのほうで世の中の変化に強く、二一世紀を生き延びるのに適していると思います。変化に抵抗力のある町は、部分最適化でつながり、お互いのネットワークで情報交換ができるような町なのです。そういう町づくりには、専門家に一定の権限を与える必要があります。

西村 先生は、ほかの国の町と違って、常に変わっていくというのが日本の町なのだとおっしゃっています。たまたまい時代になると発展するが、時代が変わるとつぶれていくといった町ではなくて、どんどん重点が移っていく町

実際に、東京の中心はだんだん移っています。それに従って、町の様相も変わります。そこに、失ったものに対する哀惜の情や、新しいものへの驚きなどが組み合わさって、日本的な美しさが出てくると思います。美しい町とはそこにある目に見える静的なものだけではないのです。

本日は、多くの示唆に富んだお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。